

大藪龍介著『明治国家論：近代日本政治体制の原構造』

柴尾，健一
九州大学大学院法学研究院協力研究員

<https://doi.org/10.15017/22994>

出版情報：政治研究. 58, pp.187-189, 2011-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：



大藪龍介著

『明治国家論―近代日本政治体制の原構造―』

(社会評論社、二〇一〇年、三一八頁)

本書は、同氏前著『明治維新の新考察』に続き、「ニュー・マルクス主義」の立場から明治国家を検証した「明治国家体制」論である。

本書は三篇から構成されている。第一篇は、明治期日本に影響を与えたイギリス、フランス、ドイツの「初期ブルジョア国家」を四つの基準から比較検証している。また第二篇では「明治国家論」をめぐる先行研究の検証ならびに「補論」を通して、前著および本書に通底した分析視角を提示する。そして第三篇では、第一・二篇を踏まえ「明治国家体制」論を展開する。

まずイギリスでは、一六八八・八九年の名誉革命以降を「初

期ブルジョア国家」と設定し、名譽革命直後のウィリアム三世、続く女王アンの時代（「国王政府の時代」、その後のウォルポール政権時代（「政党内閣の形成の時代」、そしてピット政権時代（「政党内閣の確立の時代」と三期に分け概観される。著者によればこの時期は、国家元首と政府首長の関係が融合から分離へと進行する一方で、議会が国家権力の中枢として機能した点を考慮し「議会的君主政」と規定する。

つぎにフランスでは、一八〇四〜一四年の第一帝政期、ならびにその後の復古王政期をそれぞれ検証している。第一帝政では、国民の支持に立脚したナポレオンによる独裁政治、国家元首と政府首長とが融合^①を概観する。著者はこの時期をボナパルティズムと規定する「マルクス主義的定説」を検証し、この「定説」に潜む「根本的な謬点」を指摘し、この「謬点」を克服する新たなボナパルティズムを提示する。次ぐ復古王政で著者は、ウィーン体制の枠組みから生まれた第二次王政復古を概観し、「初期ブルジョア国家の立憲君主政の一つの新しい型」としてこの時期を「君主主義的立憲政」と規定する。

最後にドイツでは、ビスマルクが宰相として在任した一八七二〜九〇年までのドイツ帝国（一八七二〜一九一八）を「初期ブルジョア国家」と設定し、「ビスマルク帝国」の統治形態

を検証している。ここでは、帝国憲法からみた「ビスマルク帝国の構造」を踏まえたのち、ビスマルクが国民自由党と協調して自由主義経済政策を進めた一八七二〜七七年、またその後の保護関税政策へと移行していく「保守主義化の時期」（一八七八〜九〇年）をそれぞれ概観している。そして著者は、「ビスマルク帝国」の国家体制を通説のボナパルティズム、ならびに望田幸男氏の「君主主義的立憲制」の限界を明らかにした上で、新たに「立憲政府政（政府主義的立憲政）」と規定する。

第二篇では、第一・二章で「先行理論」の検証、またこれに加え補論一・二として『明治維新の新考察』への批評に対する回答を述べられている。

第一章の「先行理論」では、講座派の天皇制絶対主義論を取り上げる。ここでは、講座派理論を「全面的に礼賛」し受容した中村政則氏の「近代天皇制国家論」の「不適切さ」を明らかにする。一方第二章の「先行理論」では、「ボナパルティズム説を取り上げる。ここでは、「ボナパルティズム説を無批判で受け入れた」服部之総氏、「二つの難点が所在」する上山春平氏をそれぞれ取り上げその「不適切さ」を明らかにする。

補論一では前著を書評した毛利敏彦氏および永井和氏に対

する回答が、また補論二では西川長夫氏の国民国家論に対する検証が行われる。

第三篇の「明治国家の分析」では、第一章において「分析的方法的視座」が明示された後、第二、三、四章にかけて「帝国憲法制定・帝国議会開設」期から日清戦争期を中心に「明治国家体制」論を展開する。

第一章では、三つの「方法的視座」が明示される。一つは、「複合的発展」である。「複合的発展」は、一国の発展史観ではなく、国内外の複雑な諸関係を考慮した発展史観から、マルクス主義理論とは違った「政治的上部構造の独立性」を強調する立場である。二つは、近代史研究全般に通底する「欠陥」である自由主義と民主主義の「理論的混同」を明確に区別する。そして三つは、明治国家を「明治国家体制」として把握することである。ここでは、明治国家を「憲法中心のアプローチ」から検証するのではなく、政府、議会、国内世論のそれぞれの動向と相互の関係から「帝国憲法」の政治過程を検証する必要性を強調する。

この「方法的視座」を受け第二章では、明治十四年の政変以降の「帝国憲法制定・帝国議会開設」をめぐる政治過程を検証する。

第三章では、日清戦争下の抗争から協調へと向かった政府

と議会の動向、繊維産業が主導した国内産業の動向、そして戦中戦後を通して形作られる「日本型国民国家」の特徴をそれぞれ検証する。

第四章では、「ナショナルシンボル」としての明治天皇を明らかにする「明治天皇制の新展開」を示す。

以上の検証を踏まえ「終わりに」において筆者は、「上からのブルジョア革命」を達成した明治国家を「君主主義的立憲政に傾斜した立憲政府」と結論づける。

(柴尾健一)